

# 覚王寺だより

9  
2021  
No.566



**お彼岸は故人を偲びつつ、お念  
仏の教えに耳を傾けるご縁に。**

お盆が終わりましたが、九月もお寺では「報恩講」、そして「秋のお彼岸法要」と大きな法要が続きます。(※九月十九日の「任職継職奉告法要」は延期になりました)

年に二回、春分と秋分の日をはさんで前後一週間ずつあるお彼岸。仏道修行のために設けられた日本独特の仏教行事です。迷いの世界を此岸(しがん)というのの対して、彼岸とはさどりの世界を表す言葉です。

「彼岸とは、念仏の教えをいただいたものが、いのち終えて生まれていくさどりの世界。仏となった懐かしい方々がおられる、阿弥陀如来の西方浄土のことである。善導大師はお示しになる。『西の岸の上に人ありて喚ばひていはく、なんぢ一心正念にしてただちに來たれ、われよくなんぢを護らん』阿弥陀如来は『必ず救う、われにまかせよ』と、西の岸よりよびかけておられる。如来のよび声は、南無阿弥陀仏の号号となつて、今この私に届いている。如来に抱かれ、先に浄土へ生まれた方々に導かれて、彼岸へとただ一つの道、念仏の道を歩むのである」(『拝読浄土真宗のみ教え』)

浄土真宗においてお彼岸は、浄土に生まれた故人を偲びつつ、自分自身がその浄土へ到る道であるお念仏の教えに耳を傾けるご縁の期間です。覚王寺では九月二十三日、午後一時より法要を勤めます。よろしかつたら秋のお彼岸法要にお参りください。

## 9月の法要・行事

## 10月の法要・行事

1日(水) 13時00分~14時00分	常例法座	1日(金) 13時00分~14時00分	常例法座
9日(木) 14時00分~15時00分	お寺でヨガ	12日(火) 13時30分~15時30分	お寺でペン習字
14日(火) 13時30分~15時30分	お寺でペン習字	14日(木) 14時00分~15時00分	お寺でヨガ
15日(水) 10時00分~12時00分	お寺で絵手紙	20日(水) 10時00分~12時00分	お寺で絵手紙
16日~18日	追悼法要・追悼の灯火・報恩講	26日(火) 13時30分~15時30分	お寺でペン習字
23日(木) 13時00分~14時00分	秋のお彼岸法要	28日(木) 14時00分~15時00分	お寺でヨガ
28日(火) 13時00分~15時30分	お寺でペン習字	※コロナの感染状況により、中止する場合がございます。	

今年もお盆が終了。八月十六日にはお寺で  
のお盆法要「盂蘭盆会法要」を勤めました。



八月十六日、お寺でのお盆法要「盂蘭盆会（うらぼんえ）法要」を勤めました。約四十名の方々がご参拝くださり、皆さんで「しんじんのうた」をお勤め。参詣者の皆さんには声を出さずにお勤めしてもらいました。ご法話は布教使の桜庭尚吾師がプロジェクトを使ってさまざまな映像を交えながら、「地獄」についてわかりやすくお話いただきました。

## 人生100年時代

### 終活から集活へ

Vol. 9

\*もう一度、

地域住民同士の絆をつくる就活を！

一昨年（2019年）12月中国湖北省武漢で確認された新型コロナウイルスはわずか3ヶ月で全世界に拡大しパンデミック（世界的な流行）状態を引き起こしました。

日本国内では昨年（2020年）1月に最初の感染者が確認されて以来、政府は状況打開のため昨年（2020年）4月東京都他6府県に第1回目の緊急事態宣言を発出し、その後対象地域を全国に拡大。国民にマスクの着用、不要不急の外出を控える、県境を越える旅行を控える等々の自粛要請、飲食店の営業時間の短縮、休業、酒類提供の停止などの施策を実施するとともにワクチン接種事業を展開しています。感染拡大の勢いは衰えず、

オリンピック開催直前の7月12日に異例の第4回目の緊急事態宣言を発出しましたが、好転の兆しは見えず国民は自粛に疲れ、地域も小さなイベントや会合なども自粛せざるを得なく疲弊の一途を辿っています。

特に高齢者の多い地域では外出控えて極端な運動不足による体力の低下、話し相手がないことで認知機能の低下などが報道されています。

長期化するコロナ問題は、今後の私たちの

地域生活スタイルにも多くの課題を提起していますが、一番大切な事は私たち一人ひとりが安全で安心に生活できる地域社会、穏やかな地域コミュニティの絆（信頼と助け合い）を協力して創り上げることでは：と考えます。

（一社）終活マイライフは、人生100年時代の終活は死後の準備ではなく、これから生きなければならない時間を少しでも安心して生きるための準備と考え、終活＝集活（集い、語らい、きずなをつくる活動）を提案しています。

コロナ禍の今、感染が心配で集まらない：とお叱りを受けるかもしれませんが、ワクチン接種もかなり進んできていますので、マスクの着用、手指の消毒、お部屋の換気等々の注意を払いながら、これまで親しくお付き合いしてきた人たちが少人数で集まり、お互いの絆を再確認する交流を始めてはいいかでしょうか？

コロナ終息後の社会はより一層「遠くの親戚より近くの他人」「向こう三軒両隣」＝生活圏住民同士の信頼と絆が求められる社会になるのではないかと想像し提言をしてみました。

（一社）終活マイライフ

理事 桜庭康喜